千夜詠
表紙イラスト：鈴音れな
二次元ぷち文庫
いじめっ娘彼女
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『いじめっ娘彼女』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

いじめっ娘
彼女
千夜詠
表紙／鈴音れな
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

無道(むどう) 省吾(しょうご)

正義感のため拳を振るう、校内で最も強いと言われる少年。しかし他人には教えることのできないトラウマがあって……

岸木(きしぎ) 心子(こここ)

省吾の幼い頃からのトラウマを生んだ張本人。数年ぶりに転校先から戻ってきた。小柄な割に胸は大きめ。

肌寒さを感じる季節ではあったが、その朝はよく晴れ渡り、小高い丘の上にある校舎の真っ白な壁が午前の日差しをよく反射していた。それは灯台の光のようで。社会の荒波に出る前の小船達、つまり学生達を導いている。目的を持って、あるいは流されるままに、彼らは今日もまたそこを目指して歩みを進めていた。

どこにでもあるようなこんな光景の中、彼女は新しい生活に期待と不安を胸中に秘めながら、その群れに混じり入っている。それでも人目を引いてしまうのは仕方のないことだった。

少し癖があって横にふわふわと広がったような艶やかな長い髪。それは光の加減からかピンク色に輝いていた。それを更に濃桃色のリボン二つで飾っているものだから、あどけなさを残したような顔立ちと相まって可憐さを際立たせている。小柄で華奢に見えて、出るところはしっかり出ていた。一歩歩くたびに胸元がプルンと大きく揺れて、そこだけがはちきれそうなのだ。

ぱっちりとしたヘーゼル色の瞳の美少女。そんな彼女を一目見た男子ならば、つい声を掛けたくなるものだろうが、大抵は臆してしまったり、常識的に無作法なことはしないもの。彼女は今、私立霧宮学園の制服を着ての登校中。真新しいそれは、襟首に紺色のリボンが巻かれ、白のブラウスの上にやはり紺のブレザーを羽織っている。ミニ丈のプリーツスカートからは扇情的な太股が覗け、ニーハイソックスの微かな締めつけでむっちりとし

た肉の盛り上がりを見せていた。
だが、人の気持ちや都合などといったものはお構いなしといった連中はどこにでもいた。
枯葉の落ちていく並木道。校門まであと百メートル足らず。同じ学園の制服を着た学生達が足早に過ぎていくのに、彼女の足は止まってしまっていた。
「え、えええと……、何か、御用でしょうか？」
正確には止められてしまっている。
「ねえ、彼女、可愛いね。どーこ、行くの。へへ……」
そんなものは見れば分かるだろう。そんなつっこみを小声で呟く学生達も、係わりあいを嫌がって無視して行ってしまう。少女の周りを取り囲んでいるのは、見た目もあからさまな不良三人組。自分達と同じ位の年代のようではあったが、学校に通っているかも、仕事をしているかも疑わしい。
「あのぉ、そろそろ行かないと、遅れちゃうんですけど……」
しかし、この少女、自分がどれだけ危機的状況にあるかをあまり理解していない様子だった。小首を傾げながら、いったいこの人たちは自分に何の用事があるのか不思議に思っているようでもあった。
「いいじゃん、学校なんて。俺たちと、楽しいことしに行こうぜ」
「ああっ、だめですよ、学校なんて、って言ったら。お勉強を教えてもらったり、部活で

汗を流したり、青春なんですよぉっ」
ぷんぷんと怒ってみせる。ほんのりと脱力させられて、その愛らしさに目尻の下がってしまう不良達。
「いっ、いいから、こっちこいって」
いきなり手首を掴まれて、グイッと無理やり引っ張られる。逃がしはしないというようにきつく、少女は顔を顰めた。
「痛い！　痛いってばぁっ！　んっ……、痛いって言ってるじゃないですかぁ！」
ブオオン！　と風を切って、バシッ！　と彼女の鞄が男の顔を直撃した。不良の一人はよろめいて、少女の手首は放される。
「このアマぁ……っ、優しくしてやってるのによ」
三人が同時ににじり寄ってくる。歪んだ狂気にも見える顔。いよいよ本性を剥き出してきて、流石にこの少女にも身の危険を感じずにはいられなくなる。
「おい、顔は殴るんじゃねえぞ。やる気がうせちまうからな」
「へへ、分かってるって」
「俺はちょっとぐらい引っ叩いて、泣き叫ばせるのが好きなんだけどな」
長い坂沿いの壁際に追い込まれていく。怯えた小動物のように震えて、顔は今にも泣き出しそうに歪んでしまう。乱暴されそうなことははっきりと分かった。彼らのいやらしく

引きあがった口元が、猥褻な欲求を表している。
「ふえ、や、やだぁ……。だ、だ、誰か……」
「へへ、いいねえ、その怯える顔、た、たまんねぇ。ほら、この場で、ひん剥いてやんぜ」
涎を垂らした野獣のように映った。猛禽類の鉤爪のように広げられた掌が六つ、一斉に伸びてくる。
「いや……っ！」
ギュッと瞳を閉じたその時、
「おい、うちの学生に何してる」
低く力強い声だった。そして優しげでもあって、彼女はどういうわけか懐かしくも感じてしまった。ドキンと鼓動が鳴って、ゆっくりと瞳を開けていく。男達の腕は、少女に触れる数センチ手前で全て止まっていた。その内の一人の肩を誰かがしっかりと掴んでいる。
「なんだてめえ、邪魔すんじゃ……」
振り返った男の言葉がそこで止まった。不良達の背後に立っていた彼からはまるで紅蓮の炎が立ち昇るような闘気が滲み出ていた。紺のブレザーに紺のネクタイ。私立霧宮学園の男子制服だ。
「お、おい、こいつ……」
黒髪の短髪。中肉中背で、見た目もどちらかというと真面目なタイプである。だが三人

の不良達は明らかにたじろいでいた。
「無道省吾……」
一人の呟いた名前に、少女の身体がブルッと震えた。瞬間、怖さがまったく消え去った。大きく見開いた瞳が彼だけを捉えて離れなくなった。
「び、びびるこたぁねえ。三対一だ。やっちまえ！」
ブオオン！　ビシッ！　ドスッ！　バシッ！　約三十秒後。
並木道にピクピクと四肢を痙攣させて横たわる三体があった。
「ふん」
鞄を担いで少年は去っていく。少女は呆気に取られて声を掛けるタイミングを逸してしまった。遠ざかっていく背中を見詰めながら呟いた。
「省吾……君？」
ドキドキとまだ鼓動が鳴っている。少女の瞳は潤みきり、恋する乙女の顔になっていた。

＊＊

朝の教室はいつもよりも騒がしかった。仲のいい者同士が集まって小グループを作り、噂話に花が咲いている。本日の話題はもっぱら一人の少年の武勇伝に集中していた。その渦中の人、無道省吾は自分の席に座ってぼんやりと外を眺めている。
「よお、省吾、また一つ伝説を作ったんだって」

「ふえ……、いきなり酷いよぉ。ふぁあぁ、濡れ濡れになっちゃった」
「えっ……？　うあ、ああ……」
尻餅をついた彼女の首から下が全て透明な粘液に塗れている。白いTシャツが透けて、たわわな巨乳の乳肌の新雪のような色合いがはっきりと見えた。ぷるんと柔らかそうな弾力の大きな膨らみにあって、先端の乳首だけがツンと尖ってその桜色を浮き上がらせている。それだけではない。小さなピンクのショーツもねっとりと濡れて秘肉に張りつき、漆黒の園とその土手肉が微かな盛り上がりを見せていた。その中心を縦スジが切れ込んで、牝本体の形状が露なのだ。
ローションに濡れ光沢したむちむちと肉感的な美少女の肢体。ゴクリと喉がなった瞬間、少年の股間からタオルがはらりと落ちていく。
少女の大きな瞳が丸まって、刹那沈黙。パチリ、一つ瞬きをした。
「肌色の、おっきな、お芋……」
「うわぁあああああ！」
慌てたその瞬間、ローションに足が取られて滑り倒れた。ドスンとお尻から落ちて、鈍痛に身体が痺れる。
（み、見られた！　よりによって、こんな、状態になっているのに……また弱みを握られる！）

エッチシーン試し読み
ここから

タオルを探して、手を伸ばす。あたふたした少年を、少女はほんのりと頬を桜色に染め上げて潤んだ瞳で見詰めている。泣き出しそうな彼に、彼女はゆっくりと寄ってきた。

「く、来るな……」

湯船に背を預けたまま金縛りにあったように動けないし、隠せない。ぬるぬるに肢体を濡らした少女は四つん這いで近付きながら、ぷるん、ぷるん、と巨乳を揺らし、Tシャツ越しに透けて見える勃起したような乳首の先端からまたねっちょりと粘液が滴っていった。

「省吾君……、嬉しいよ。女の子で、ここで、そんな風になってくれて……。だめ、隠さないのっ！」

まだあどけなさを残したような麗顔が、少年の股間を覗き込んでくる。

「ひ……っ、ば、バカ、どこに顔を近付けて……」

熱ばんだように潤みきった瞳に牡の生殖器が映り込んでいた。血管が浮き上がった肉幹は、本来は誇らしげに自慢してもいいほどに太くて長い。その先端部は更に太いカリを広げて、赤黒い光沢色で膨らみきっていた。今の少年の心に反して雄雄しく、シャワーで軽く流した程度ではその独特の牡臭さは消えていない。半開きにさせた幼馴染みの艶やかな唇から生暖かい吐息が切なげに吹きかけられる。

「ゴツゴツして……ハア……ぁ、別の生き物みたい。こんなに腫れ上がって……、ふあ、あ、炎症したみたいになっちゃてる」

とろん、と瞼の下がった恍惚のような表情を少女はしている。あの頃とは違う反応で見詰められているのに、昔と同じ緊張感に少年の顔はどんどん強張っていった。
（もう、見るなって……っ！）
屹立をやめない肉棒に反して省吾の心は萎縮している。心身の不一致に混乱する彼に追い討ちをかけるように愛らしい指先が伸びてくる。
「さ、触って、いい？」
頑と拒むように顔を横に振った。はずだった。
「えへ。じゃあ、触るね」
「ちょ、ちょっと、待てぇッ！　ひやっ！」
ねっとりとしたローションに塗れた可愛らしい掌が、一瞬だけ戸惑いを見せて、遠慮なしに硬直した肉棒を握り締めてくる。
くちゅ……っ！　暖かく柔らかく、ぬるぬるした感触に包まれた。
「うわ……っ、お、おい。や、やめろ、って……。あ、ああ……」
はぁ、と甘ったるい吐息が少女の色めいた唇から漏れていく。
「ふあっ、はぁ……ぁ、硬くて、熱い……。ピクンピクンしてる」
省吾の分身は、幼馴染みの少女の手の中で確かに脈打ち、悦びに跳ねているようだった。
（ア、アレが、女の子に、さわ、触られてる！　力が抜けて……）

自分で触った時とは比べ物にならないほどに気持ちいい。瞬間に下腹部全体が滾り狂い、ズズンと少女の手の中でまた一段と膨張してしまう。亀頭が真っ赤にパンパンに腫れ上がったようになって、先端の鈴口からぬらぬら漏れだした淫水が幹を伝って彼女の指先に到達していった。

「こら……っ、も、もう、やめ……、やめ……ぇ」

いつのまにか情けない声を搾り出していた。とても気持ちいいし、身体はもっと触れてもらって、手コキの刺激を強烈に欲している。それなのに怖くて仕方がなかった。

「そ、そうだね。握っているだけじゃ、もどかしいよね。ごめんね。慣れてないけど、ちゃんと私、頑張るから！」

じっと感動したように男性器を見詰めていた心子が顔を上げた。その瞳には闘志に似たようなものが漲っている。

（なんで、そうなるんだよ。って、何を頑張るんだよぉっ、ひゃっ！）

ぬちゅ……っ！　くちゅ、くちゅ……。

両手が添えられて、優しく握り締められている。それがゆっくりと上下に滑り、ぬるぬるしたものと一緒に肉茎が擦られた。

「こ、こうするん、だよね……。ハァ……」

僅かに口角を上げて、嬉しそうに少女は微笑んでいる。細めた瞳からの熱い眼差しが男

の局部に突き刺さった。
ぬちゃ、ぐちゅちゅっ……。気持ちいい、が肉棒からどんどん溢れてきてしまう。
「うはっ、はぁはぁ、こ、こんな、やめ……くっ、ううう……」
ねとねとしたローションに塗れた巨乳少女の指先が腫れ上がった亀頭のカリ首を舐めてくる。肉棒はぬらぬら光沢して、それを握り締めている心子の姿が堪らなく卑猥に見えた。
「ぁふぁ……ぁ、何だか、私、変な気分に、はぁはぁ、なっちゃう」
濡れ透けた巨乳の先端の乳首がまた少し淫靡に伸長している。恍惚したように幼馴染みの表情は蕩けていて、瞳の潤みが増していた。
（くぁ、ああダメだ。こ、こんなこと、うっ、はあ、続けられたら……）
睾丸の皮がきゅっと締まり込んでくる。その内側で活性化したマグマのような精液が音を立てていた。
くちゅっ、くちゅぐちゅっっ！　ズル剥けた亀頭が鋭敏に少女の掌を感じてしまう。
「はあ、はあ、んっ……ぁ、ど、どお、気持ち、いい……？」
発情したような呼吸で、顔を近付ける心子の息が肉棒に当たってきた。
「き、気持ちいいわけ……な、ない、だろ、ぉっ……」
早くも噴出しそうなものをキュッとお尻の穴を窄めて耐えている。逃げ出したいのに身体がもっともっと気持ちいいのを続けて欲しがっていた。溜まり込んでいるドロドロとし

た欲求を一気に噴出したくなってしまう。でも……。
（出した途端に、うっ、はああ、きっと、大笑いされるんだ。く、くそ……ま、負けん）
ぬちゅぅっ！　くちゅくちゅくちゅっッ！　二つの掌で作られた少女の手筒が、もっと苛烈に上下しだす。
「ぁはああ、じゃ、じゃあ、もっと、もっと、激しくしてあげるぅっ」
膨れきったカリ首が何度も連続して手コキの刺激に見舞われた。
「うひいいい！　だから、やめ、や、や、やめない……かっ」
無垢な少女の手に駆り立てられて、童貞少年の強張りがピクンピクンと躍り始めてしまう。
（だめっ、だ、出しちまうぅううっ！　でも、もしやめられたら……）
いやだ。もう抑えられない。これほどまでに募った欲求。この後、どんなに馬鹿にされようとも、今は射精しなくちゃ収まらない。身体は逃げ出せない。もう結果は見えていた。
「あはぁ……っ、なんか、苦しそうなのに、はぁはぁ、嬉しそうだよぉ、省吾君……ん」
弄んでくる少女の顔が悦楽に歪んでいた。その恍惚した表情を目にした途端、
「うっ、うわあああ、で、出る！　出る出るぅうう！」
「ふぁあっ、はああ、いいよ。ほらほらぁ、ぅはあ、ハア、出しちゃぇえ！」
どびゅる！　びゅるびゅる、どぷどぷ！

「はあ、はあ、な、なんか、疲れてきちゃった……」
ハイソックスの足首から先をぐっしょり濡らしていた少女は不意に立ち上がった。
「ふぇっ⁉　えぇ……っ！」
ようやく自らの欲望を認め始めた少年に対しての気まぐれな仕打ち。涙目になって縋るような瞳を幼馴染みに向けてしまう。
「ふああ、やだ、省吾君。そんなに続けて欲しかったのぉ？　ふうん……」
真っ赤になって、でも否定もできない。不安定にベッドの上に立っている少女は、振り返りながら意地悪そうに、でも妖艶にこちらを見詰めている。
「じゃあ、約束してくれたら、省吾君のされたいこと、してあげるよ」
ジンジンと肉棒が熱い。このまま済まされたら、この欲望をどこにぶつけたらいいのか分からない。必死になって頷いてしまっていた。
「あは……ぁ、じゃあ、もう危ないことしないで。いい。喧嘩なんて、いけません」
うん、うん、と二度頷いた。
「それから、浮気しちゃ、駄目だよ。昔から、今も、それからこれからもずっと、省吾君はここここ一筋じゃなきゃ」
迷うことなく頷いた。きっとこんなことしてくれるのは彼女しかいない。
「はあぁ、嬉しい。じゃあ、最後ね。省吾君は、ここここの言うこと、何でも聞くこと。例

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

えば……」

完全に向き直った心子は上半身をぐっと屈めて顔を覗き込んでくる。少年の視線は逆上せたような可憐な顔とぷるんと大きな房を実らせた胸元を行ったり来たりした。巨乳の柔肌はほんのりと汗ばんで、その熱ばんだ香が芳しい。

ズズッと押し込まれていたショーツが抜き取られる。

「うわあ、ぐしょぐしょだぁ。ねえ、省吾君。これ、明後日、学校に穿いてきてくれる？」

女の子のエッチなショーツ。それは自分の唾液と彼女の淫蜜で汚されている。

「明日には乾いているよね。でも洗っちゃだめだよ」

「そ、そんなこと、できるわけ……」

「嫌なの？」

少し寂しげに表情を少女は見せた。

「う……っ、や、やるよ」

少女は途端に凶悪な虐めっ子の笑みを見せる。

「あはは、そんなにここに虐めて欲しかったんだ。省吾君って、変態」

その顔を見詰めながら、肉棒がまたピクンと跳ねてしまった。美少女の所有物にされてしまったようで、弄ばれるのが嬉しくなっている。そんな自分を見せても、心子は全て受け入れてくれる気がして、昔の表情になっていた。これが本当の自分。どんなに虐められ

ても彼女の後を付いていったのは、心子がずっと好きだったから。
「だ、だから、ここ……。お、俺……」
「うん。いいよ、省吾君」
その時の心子は、もう一人の優しい彼女の表情をしていた。
「自分からは女の子に触れられない省吾君の代わりに、ここが、犯してあげるよ」
幼馴染みが制服を脱ぎ捨てていく。プリーツスカートもブラウスも少女の身体からなくなって、紺色のハイソックスだけの姿。新雪のような生肌は、ほんのりと桜色がかかって、甘ったるい香を放っていた。
「ぁはあ……。ほら、ここも、こんなに感じていたんだよ」
細身には大きすぎる乳房の桃色の先端が、コリコリに突起していた。微かに汗ばんでいるようで、しっとりとした木目細かさを視覚からも感じさせる全身にあって、薄い恥毛から微かに覗ける牝裂の辺りが特に湿気に満ちている。
（こ、こんなエッチな身体をした子が、俺を……犯してくれる）
そんな喜びを表情に出してしまったのか、少女はまた虐めっ子モードに入る。
「やだぁ、省吾君、こんな汚くて臭いオチンチン、簡単に気持ちよくしてもらえると思っているの？　自分でも、お願いしないと、はぁはぁ、い、いけないんだよぉ」
そう言うなり、少女は背を向けた。長いピンクの髪が染み一つない美しい背中に垂れて

いる。括れた腰まわりから、先程顔を塞いでくれたお尻が球体のように肉付いて、欲望をそそり立てた。むっちりとした太股が僅か上げられる。

「こ、ここここ？　うぐっ！」

硬直しきっている肉棒が踏みつけられた。

「はあぁ……はあ、はあ……ほうら、は、早くお願いしないと、潰しちゃうんだから」

ぐにゅぐにゅっ！　きつく圧される感覚は本気のようにも思えてしまう。

（うわっ、ああっ、こ、これは、これで、き、気持ち、いいかも……）

少女も強く興奮しているように見えた。お尻のワレメの陰影から覗けるぷっくりとした陰唇。グリグリ牡の本体を踏みにじりながら、その筋から食み出したサーモンピンクの花弁がぬちゃぬちゃと湿りを増していく。

ピクピクッ、と少女の足裏で肉棒が悶えた。

「くっ、ううっ、お、犯して、はぁはぁ、欲しい。こ、ここここに……ぃ！」

「しょ、省吾君。ひゃはっ、はああ、うん。じゃあ、沈めちゃうんだから……ぁっ！」

背を向けたまま心子は腰を降ろしていく。

「こ、こんないやらしくて変態なオチンチンとエッチしてあげるんだから、うふぁ、省吾君は、ここここの奴隷にならなきゃ、だ、ダメなんだからね」

愛らしい指先が肉棒に添えられて、そして握り締められる。

「うはっ！　はぁはぁ、う、うん。分かったから、だから、早く……」
少年の剥き出しの股間の上で、少女はM字に開脚する。ねっとりと涎を垂らしたように女陰の中心から淫蜜が一筋漏れていった。垂直に上げられた強張りの先端をぬらぬら濡らしていく。
「ぁふあっ、はあ……、凄く、熱い……。こんな、大きくて……、オチンチン〝は〟初めて……」
「は？」
「い、いいの！　省吾君はここの奴隷なんだから、余計なこと言っちゃダメなんだから！」
幼馴染みの顔が真っ赤になった。彼女の機嫌を損ねたかと一瞬不安になる。だがそんな心配は無用だった。
淫靡な腰つきが降りてくる。尻房の丸みを帯びた下辺の向こうに覗ける破廉恥な粘膜肉を凝視して、自分の荒々しい息遣いに強い興奮を自覚した。
「うはっ、っはあ、じゃあ、飲み込んであげるんだから……。はうっ！　はあ……っ」
ぐにゅっ！　ぬぷっ……。肉ビラが亀頭部を挟み込む。
（うわぁっ！　柔らかくて、ぬちゃぬちゃして、あ、暖かい……）
銜え込まれた部分から、ぶじゅぶじゅ、牝汁が漏れて肉幹を伝っていく。

（ああ、まだちゃんと入っていないのに……、くあああ、女の子って、き、気持ちいい……）
振り返ってくる瞳がうるうる光って、悦楽に浸るように唇が開け放たれている。そこから熱篭った、はぁはぁ、という吐息が漏れ続け、少女もまた強い興奮状態にあるのだと教えてくれた。
「いれ、ちゃう……」
ぬぶぶっ！　目の前で肉棒が女陰に飲み込まれていく。
「くっ！　ぁひゃ……ぁ、っはぁあああ！　は、入ったぁああっ！」
ずぷずぷぷぷ！　肉花弁が更に押し広げられ、濡れた膣孔が減り込んでいく。ぬちゃぬちゃした卑肉という快感に包まれて、体中が蕩けるようだった。
（む、むちゃくちゃ、気持ちいいっ！　これが、オ、オマ〇コ……。これが、女の子……）
挿入の瞬間、刹那の間、身を硬直させた幼馴染み。強張りを半分飲み込んだところで、一度深く呼吸をして、そこから、
「んっ……、っぷはぁ……っ。はあ、はあ、も、もっと食べちゃうん、はあ、だから……」
ぬっぷ、ぬぷぷっ！　腰が沈み込んでくる。柔らか尻肉が少年の鼠蹊部に当たり、女体の温かさを感じた。
「うはああ、俺、俺……女の子とエッチしてる」
感動と気持ちいいがどんどん溢れてくる。

「ふはぁ……、はあ、はあ、省吾君の、オ。オチンチン、あふあああ、き、気持ち、いいよぉ。ゴツゴツして、硬くて、熱くて……ぇ、ふぁっ、はあ……、やっぱり、ち、違うんだ。茄子とは……」

大好きな幼馴染みの処女を奪ったのが物言わぬ野菜であった事実を聞き逃すほどに、気持ちよくって堪らない。淫蜜の溢れた膣の中で、粘膜のヒダヒダに肉棒がしゃぶられていた。初めて肉壷を味わう男性自身は、その刺激だけで、イッてしまいそうなのだ。

「こ、ここ！　で、出ちゃう……っ」

「やあんぁはぁ、今、終わっちゃったら、あ、後でお仕置きなんだからっ！　んっ、じゃあ、こうしてあげちゃう」

ピンク色の艶やかな髪から少女はリボンを一つ解く。それを半分繋がった状態のまま、肉茎の根元にきつく縛りつけた。

「くっ、うく……ぅ」

「あはは、可愛い。こうしておけば、はあ、はあ、出したくても、出せないでしょ。ふはぁ、はぁはぁ……」

絞り込まれて肉棒がググッと張りを増す。牡の部分も拘束されてしまったようで、弄ばれているような被虐感が湧いてきた。

「はあぁあ、ここの中で、んっはあ、省吾君が大きくなったぁ……」

彼女のお尻がほんの少しくねり動くだけで、彼の分身は悦びの悲鳴をあげているようだった。

繋がったまま少女は両膝を下げてベッドにつける。少年の腰は彼女の汗ばんだ太股に挟まれた。幼馴染みは四つん這いに近い形になって、省吾の位置から、お尻の穴もぬらぬらと濡れそぼった結合部も丸見えになる。

「あ……っ、す、凄い……」

ドスケベな光景がビンビン股間に響く。

「じゃ、じゃあ、っはぁ……、動かすよ……」

「う……ん」

男と女の台詞が逆転しているようで、拘束されて成す術なくて身を任せているこの状況は、本当に強沈されているのだと感じさせられる。丁度胴体の距離向こうで彼女の肛孔がヒクヒクと蠢いていた。

ぢゅぶっ！　ぬっぷ、ぬっぷ……。

「く……っ、はぁぁ……っ、あぅん、はんっ……」

心子のお尻が波打つように少年の股間の上でくねりだす。

（う、動かされると、うわぁぁっ、もっと、気持ちいいっ！）

柔らかな尻房がたぷんと揺れる。肉棒に押し広げられた濡れた秘貝が、減り込んだり、

捲り上げられたりを繰り返す卑猥な光景。互いの陰毛が擦れあい、牝汁が漏れ伝うと、ぬちょぬちょ、と無数に糸引きしていた。

ぬぷぷっ！　ぬぷっ、ぢゅぶぢゅぶっ！

「そ、そんなに、くっ……、されたら……ぁ」

ビクビクッ！　射精してしまったように強張りが跳ねた。だが淫蜜に塗れたリボンにきつく縛られ、本流はそこで塞き止められている。肉壷の生暖かな粘膜壁に包まれて、陰茎の先端からだらだらと先走る淫水だけを垂れ流し続けた。

「ふひゃ……ぁ、はぁ、はっ、あうぅぅん！　省吾君がぁっ、中で、ひゃあんっ、ピクピクしてるぅううっ！」

ぷるん、ぷるんっ、と巨乳が激しく揺れて、自らの身体を叩きだす。幼馴染みの肉体が朱色を帯びて、更に全身から汗を滴らせ始めた。蕩けた恍惚の表情で、上下左右に淫乱に腰を振り、我が侭に肉棒がむしゃぶられる。

ぐちゅぅっ！　ぬぢゅぢゅっ！　ぬっぷぬっぷ……。

射精時の快感だけが積み重ねられていく。少女の性欲のためだけに制限されて、満足させるまでは決して解放されない。

（俺は、はぁはぁ、ここの……奴隷……）

彼女が気持ちよくなるためだけの存在に堕ちていく。それが堪らなく嬉しくなってしま

うマゾヒズムに酔っていった。

「ほらほらぁっ、変態省吾君、はあ、はああっ、き、気持ちいい、でしょぉっ。……ッはぁ、あああああ、ここもっ、いっ、いいよぉおっつ！」

ぐちょぐちょの膣肉がきつく強張りを締めつけてくる。結合部から溢れ出る牝汁が睾丸を舐めるように垂れ落ちていった。それが心地いい。

「こ、ここっ……。うっ、くぅぅ……、俺、も、もう……」

「いやぁああんっ！　もうちょっとぉっ！　もうちょっとなのぉ……っ」

ドスケベに振り乱される尻肉に珠の汗が滲んでいる。髪を振り乱しながら、パン、パンッ！　と尻房で少年の下腹部を叩く幼馴染み。逆強姦の肉悦で、悦びの叫びをあげながら、緩みきった唇から涎さえ滴らせていた。

（も、もう……っ、限界だよぉっ）

ヌブブブッッ！　ぶぢゅっ、ぶぢゅっ！　下から突き上げていた。募った欲求は、決して吐き出されないと分かっていても、上り詰めさせる行為をさせずにはいられない。

「あひゃ……っ！　ふぁ、っあああ――っ、き、来ちゃうぅうううっ！　ズボズボきちゃうぅうう！」

脳天が悦楽一色で響いていく。それは大好きな少女も同じであったようで、塞がれた膣孔の隙間から、ぶしゅっ、ぶしゅっ、牝汁の飛沫をあげた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/